

「お若けえの  
お待ちなせえやし！」

見出しの台詞に、すぐピンと来た読者は、なかなかの歌舞伎通ではなからうか。

弱きを助け、強きを挫く男の中の男、それが江戸時代初期の侠客として知られた幡随院長兵衛である。

佐賀藩の武士・塚本伊織の息子として生まれた長兵衛は、本名を塚本常平、幼名を伊太郎という。

生まれは「大坂夏の陣」から七年目の元和八年（1622）。世が天下泰平に移行していく中、かつて戦場を駆け抜けた武士や足軽たちは活躍の場を失い、もはや槍一本で勝負する時代は終わった。不満を身に漲らせた若者たちは、派手な女物の着物を羽織り、徒党を組んで街中を闊歩。となれば、当たり前のように町のあちこちでは喧嘩や刃傷沙汰などが頻繁に起きるようになっていた。

病死した父の遺言により長兵衛が江戸・浅草の幡随院に白導和尚を訪ねたのは、そんな輩が街を闊歩していた、ある日のことだった。幡随院は京都知恩院の末寺。幡随院前にある下谷神吉町の長屋に移り住んだ彼

は、幡随院長兵衛と名乗り「口入れ業」を営むことになる。

「口入れ業」とは大名や旗本などに奉公人を斡旋する仕事で、現代に例えると、私設の職業安定所と人材派遣業といったところ。

元和九年（1623）、二〇歳

で征夷大將軍となった徳川家光は、家康・秀忠が築いた武家封建社会をさらに安定させるため、後に徳川幕府二六〇年間の基礎となる「参勤交代」や「鎖国」を実施。この参勤交代により宿場町や港では、街道整備や資材運

搬に汗を流す人足の人手不足が慢性化していた。そこで各地に「口入れ業」を生業にする者たちが現れたというわけだ。

力があつた。旗本奴は、旗本を中心に組織された無頼集団。一方、町人で組織されたヤクザ集団が町奴だった。そんな町奴・幡随長兵衛は、花川戸で口入れ業を営みながら名を挙げていき、町奴の頭領となっていくのである。

明治期、  
歌舞伎となって  
一躍ヒーローに

長兵衛の宿敵が水野十郎左衛門成之という三千石の旗本だった。水野は街中で乱暴を繰り返す傾奇者で、大小神祇組という旗本奴の頭目である。

ただ、水野と長兵衛がどんなきっかけて男伊達を競うことになったのは、定かではない。

河竹黙阿弥が書いた『極付幡随長兵衛』（1881年）という芝居では、大小神祇組の横暴ぶりを見かねた長兵衛が自慢の腕で彼らを懲らしめ、その話を聞いた水野が長兵衛殺害を画策。明暦三年（1657）七月十八日。酒席に誘い出し、わざと衣服を汚して、湯殿に裸になった長兵衛を襲って……ということになっている。明暦三年といえ、一月に



# 墓が語る 一大事

源空寺

幡随長兵衛

旗本奴だあ？  
大小神祇組、鉄砲組、箆籠組、鵜飼組、吉屋組、唐犬組と六方ありやすが、

そちらさんはどちらさんで？  
大小神祇組の水野十郎左衛門さんですかい。

へえ、あつしが幡随長兵衛でござんす。  
おや、手打ちにするってんで？

冗談も休み休みいやはがれ！  
二本差しが怖くて田楽が食えるかってんだ！

欲しけりやこの首、そっくり呉れてやらあ！！



「明暦の大火（振袖火事）」があつた、曰くの年だった。

それはさておき、招かれた長兵衛は異であることを知りながら、「怖がって逃げた」とあつちやあ名折れになる。人は一代、名は末代」と啖呵を切り、ひとり水野の屋敷に乗り込むという筋書きだ。

このシーンを盛り上げるため、芝居では長兵衛宅に彼自身が注文していた棺桶が届く場面が挟み込まれている。むろんこれも、後世の作り話であることは言うまでもない。

ただし『厳有院殿（四代將軍家綱）御実記』によれば、水野が自ら町奉行所に出頭し、「本日、幡随院長兵衛を惨殺した」とする記述があるのは事実。「屋敷にやってきて罵詈雑言を吐き捨てたため、無礼討ちにした」というのがその理由で、町奉行は老中に報告。

ところが「長兵衛は半人であり、死人側から届け出が出ていないなら捨ておけ」ということになり、水野には何らお咎めはなかった。長兵衛の屍は神田川に捨てられたとも、水野屋敷の裏庭の片隅に埋められたともいわれる。

また、綿谷雪氏の『江戸ルポルタージュ』（1957年刊）によると、



幡随長兵衛／歌川国義画

ばんずいんちようべえ●元和8年（1622）～明暦3年7月18日（1657年8月27日）。唐津藩・塚本伊織の息とされるが、文祿2年（1593）、豊臣秀吉により滅亡させられた波多氏の旧家臣の子、幡随院の門守の子と説もある。塚本伊織の息子説を取れば、父の死後、江戸の幡随院の向導住職を頼って出府し、浅草花川戸で口入れ屋を営む。やがて名を上げて町奴の頭領となり、男伊達を競った旗本奴と争って騙し討ちにあつて死去。享年36。墓所は源空寺（東京都台東区東上野6丁目）。

粹で鯨背な  
男伊達  
町奴の幡随長兵衛とは  
俺がこことだ！

長兵衛が殺された水野の屋敷は千代田区の旧西神田小学校（廃校）付近だったとされる。

その水野も、長兵衛殺しから七年後の寛文四年（1664）三月二十七日、病気を申し立てて奉公を怠り、「不行跡である」として切腹を命ぜられた。ただし、これは長兵衛殺しとは何ら関係なかった。

庶民は  
威張った旗本より  
反骨の町人が好きだった

そんな長兵衛が眠るのは東京・東上野にある浄土源空寺。寺号は法然上人の諱である源空に由来、五台山文殊院として知られる。寺の墓地に入り、正面にある観音像のほうへ進むと、左側に二対の墓石が現れる。

向かつて左側が長兵衛、右側は妻おきんのものだ。長年の風雪を経て、所々表面が落剥しているが、今も足を運ぶファンが絶えない。隣接して伊能忠敬やその師・高橋至時の墓もあり、それぞれが国の史跡に指定されている。

へ人は一代 名は末代——  
阿波座がらすハ浪花がたや鶯は京そだち吉原すずめを羽がひにつけ江戸で男と立てられた男の中のとこ一びき  
いつでも尋ねて御せいやし  
陰膳据て待つておりやす  
（小唄江戸紫 中田治三郎）

と唄われたように幡随長兵衛は、無礼討ちを覚悟で水野の屋敷に乗り込み、威勢のいい啖呵を切ったと伝わったことで町人が英雄視し、歌舞伎や講談の主人公として語り継がれることになった。町人は威張り腐った直参旗本などより、同類の町奴のほうにヒーローを仮託したのだ。水野はとんだ敵役を引き受けさせられたのである。

ともあれ、長兵衛にとつて潔斎垢離したであろう明暦三年七月十八日が、生涯最大の一大事となったことは間違いない。